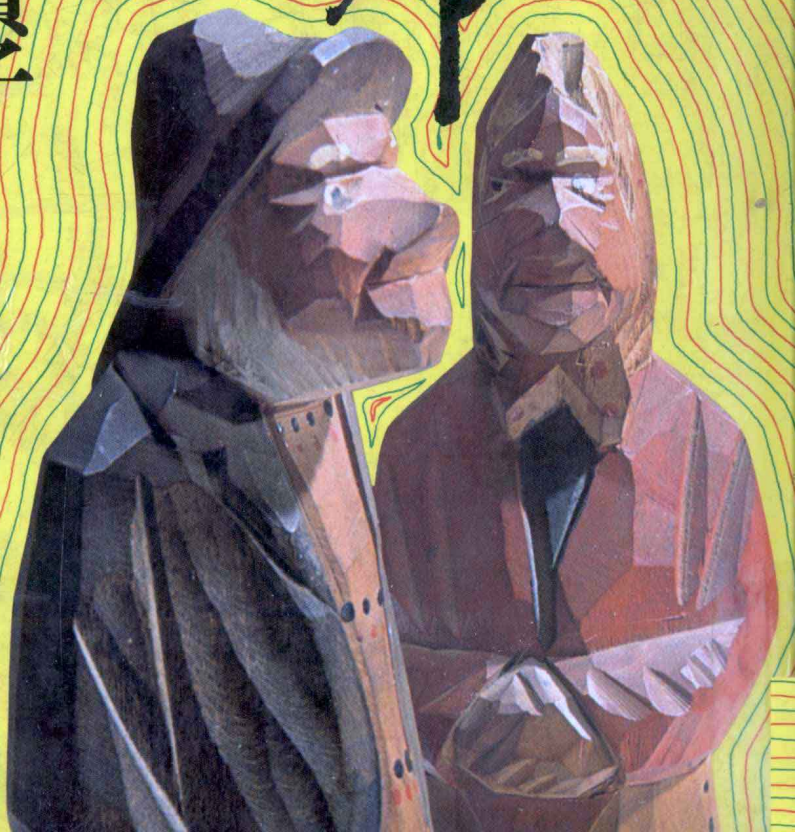


夫婦

橋田壽賀子



婦



橋田
壽賀子

検印廃止

夫婦

定価七五〇円

昭和五十三年五月一日 第一刷
昭和五十三年九月十日 第六刷

著者 橋田壽賀子

発行者 藤根井和夫

印刷 錦亨有堂

製本 錦石津製本

発行所 日本放送出版協会

郵便番号一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

目次

第一章	結 婚 式	5
第二章	親 ば な れ	42
第三章	同居のトラブル	77
第四章	母 の 家 出	105
第五章	夫 婦 喧 嘩	136
第六章	息 子 の 動 揺	168
第七章	母 の 実 家 帰 り ^{さと}	199
第八章	新 し い 出 発	232

カ
ハ
ー
・
装
幀
写
真

塩 土
崎 方
吉 弘
彦 克

夫

婦

第一章 結 婚 式

(一)

昔ながらの神前結婚式が終り、ホテルの大広間にしつらえられた披露宴会場に足を運びながらも、高村伸枝のぶえの顔はさえなかった。末の息子の清人きよとの、晴れの結婚式である。こんな顔をしてはいけないと思うのだが、ふと気づくと洗面じょうめんになっている。

やはり、もっと強くこの結婚に反対しておけばよかった、という後悔が、留袖とめさてを着た身体の奥底から、わきあがってくるようだ。

ちょっと見には、出席者も多くなかなか豪勢な披露宴である。しかし立食形式のパーティであり、こういう雰囲気になれていない伸枝は、自然、人波に押されるように広間の隅すゝまに身を寄せる形になる。

両隣りには、夫の勝利、そして今年七十三歳になる母のつぎが、同じように人波に押され、

はじき出されたような感じで立っている。

逆に、座の中央を占めているのは、新婦の弘子側の人たちばかり、という気がする。確かに、長男の昭人夫婦や、長女の久子夫婦の談笑する風景も見られるが、座をとりもっている人たちが、新婦側であることは、否定できない。少なくとも、伸枝にはそう見える。

モーニングと振袖にお色直しをした新郎新婦が、招待客の間を挨拶してまわっているが、なにしろ数が多いので、隅にいる伸枝や夫の勝利のほうまで、まわってきそうにない。

自分の親なのに、と伸枝は、華やいだ表情で談笑している清人を、うらめし気に見守った。その近くでは、新婦の母親の田代美代が客と何か言葉をかわしながら、しきりにハンカチで目を押さえている。先ほど、神前で、おごそかに式が進行している最中も、美代は同じ動作をくりかえしていた。

伸枝には、そういう美代の態度も、気にいらぬ。

「どうして、あんなに悲しいのかしらねえ」

と、隣りにいる母のつぎに向かって思わず愚痴が出た。

「あれじゃ、他人さまが見たら、あちらのほうがこの結婚に反対で、うちのほうが無理矢理娘さんをさらってくように思われるじゃないの」

「娘っていうのは、ひとにくれてやるものだからねえ」

と当年七十三歳になるつぎが、ちょっと諭す口調でいったが、伸枝には、相変らずハンカチを目頭にあてている美代の振る舞いが、オーバーでいやみとしか感じられない。弘子が、男の

兄弟の中の一人娘ということ割り引いて考えても、いやみであることに変わりはない。

見るにたえない気がして傍の夫を見ると、夫の勝利は勝利で、無表情に座の中央にぼんやり視線を向けている。この人は、いつもこうなんだわ、と伸枝は一層疎ましいような気持の底で思った。

勝利は、鉄鋼会社を今年、定年でやめたばかりである。日ごろから口数が少なく、喜怒哀楽をあまり表に現わさないのは、昔、学徒動員で軍隊にかりだされ、特攻隊を志願し、からくも生き残った体験が、よくも悪くも作用しているのか、と伸枝は思う。それでも現場の技術部長までは一応勤めあげた。こんな無愛想で勤まったのは、技術屋であつたからだろう。

宴は、もう後半に入っているが、勝利はほとんど料理に手をつけていない。この人は、一体、今日の結婚式をどう思っているのだろうか、と伸枝は思った。悲しみも喜びもないのだろうか。そういう感情を、素直に表に出すことを恥だとも思っているのだろうか。

「まあ、奥さま」

という声で目をあげると、招待客である高橋の奥さんが、にこやかに笑って立っている。

「清人さんも、ご立派になられて、あんなにいいお嬢さまと……。これで奥さまもご安心でいらっしゃいますわねえ。ほんとにおめでとうございます」

と、伸枝と勝利の二人に深々と頭をさげる。

「さあ、めでたいのかどうか」

という言葉が伸枝の口から出たので、高橋の奥さんは、驚いたように目を見張った。

「でも、奥様……」

「まだ、二十四ですからねえ。若すぎるって反対したんですけど、このごろの若い者は、親のいうことなんぞ、聞きゃあしませんでしたしょう」

勝利は、ちょっといやな顔をして伸枝を見たが、聞こえぬふりをしようとする。

「でも、一流の銀行へ就職なさって、もう一人立ち遊ばしたんですもの。奥さまも肩の荷をおろされて、これからのんびりと……。羨ましゅうございますわ。うちなんて、まだ大学でしょう、いつになったら楽ができるか」

「子供は手のかかるうちがハナでございますよ」

伸枝の声には、無意識のうちにも険がこもってしまう。高橋の奥さんは、再びびっくりしたように伸枝の顔を見た。早くも老いのかげの見えはじめた目尻や額のあたりに、相変らず不機嫌な表情が浮いている。

折よく、伸枝の長男の嫁である悠子が、

「あら、お姑さま、なにも召しあがってないんですか」

と近寄ってきたので、高橋の奥さんは、一步身をひいて二人を眺めた。

「なにかおもちしましうか、お姑さま」

「結構よ、のどに通りやしませんよ」

伸枝の険を含んだ声の調子は変らない。高橋の奥さんは、ちょっと眉をしかめ、軽く会釈をして他の招待客の方に移っていった。

先ほどから勝利は、伸枝の傍で懽然として立っていたが、見兼ねて声を出さずにはいらなかった。

「少し言葉を慎みなさい」

伸枝は、勝利の方を、きつとした目でにらんだ。

「みなさん、心から喜んで下さっているんだ。なにも、お前、こんなところで……」
「嬉しくもないのに、嬉しそうな顔しろったって、無理ですよ」

伸枝は、拗ねるような口調でいい、一層陰を増した目で勝利をにらんだ。

しようなないやつだ、と勝利は思ったが、黙って伸枝から目をそらせた。こんなふうに感情をむき出しにしたときの妻に、これ以上なにをいっても、無駄だと思った。いえば一層、感情を高ぶらせ、さらに、どんなことをいい出すかわからない。

「お姑さまのお気持、お察し致しますわ」

その場に漂いはじめた気まずい空気を破るように、悠子がいった。

「私だって、まさか清人さんが、お姑さまたちと別居なさるなんて思ってもいませんでしたもの」

数年前、長男の昭人がこの悠子と結婚する際、高村の家を継いで老夫婦と一緒に住むのは、末っ子の清人ということになっていた。それが、当の清人がいざ結婚というときになって前言をひるがえし、両親とは一緒に住まないといいだしたのである。

伸枝の不機嫌の源は、そのへんにあるのだが、この期に及んで、そんなことをむし返しても

仕方がない。

少なくとも勝利はそう思うのだが、伸枝は納得できないまま、ずるずるとこの日まできてしまったという気がする。

「お舅さまもお姑さまも、清人さんをあんなに可愛がっていらしたんですし、清人さんと一緒にお暮らしになるのが一番いいと思ったからこそ、私だって外へ出たんですのよ。それをさっさと、ご自分たちでマンションを借りておしまいになるなんてねえ」

媚びるような表情で悠子はいったが、伸枝はそれに相槌をうたなかった。悠子のいうことは自分たちに都合のいい解釈である。本来、私たち両親と一緒に暮らすのは、この長男夫婦であるべきだというのが、そもそも伸枝の考えであった。そんな思惑が崩れたのは、この悠子が昭人との結婚に際して、両親との同居を頑強に拒んだからである。なにを今さら、という目で伸枝は、よく動く悠子の口許を見つめた。

そこへ折よく昭人がやって来なかったら、伸枝はどんないやみを、悠子に投げつけていたか、わからない。

「父さんも母さんも、そんなところにはいないで、挨拶ぐらいしてまわったらどうなんだ」

昭人は、さすがに長男らしくいって、両親を広間の隅から引っぱり出そうとした。

「一通り、ご挨拶はすみましたよ」

伸枝は、動かずにいった。

「だからって、なにもそんなところで仏頂面して突っ立ってることないだろう。いくら氣にいら

ないからって、ここまできちまったんだ、せめて披露宴くらい気持よく……」

「だって、知らない方ばかりなんだもの」

と伸枝は、広間の中央で華やかに談笑している人たちを、ちらっと見やっていった。

「大体、清人の会社の方やお友だちなんて、会ったことも見たこともないし、あとは弘子さんのほうのご親戚にお知り合いだろ。そうそう話すことなんかありやしないわよ」

昭人は言葉を失って、母の伸枝を見つめた。いつから、母はこんなふうに、かたくなで意固^{いこ}地^ちになってしまったのだろうか。

「親なんて、披露宴の費用さえ出せば、もう用はないの」

「母さん」

あきれた顔で、昭人は伸枝を見つめた。悠子が、機嫌をとろうとなにかいいかけたが、伸枝のかたい表情に会って口を閉じてしまった。しようがないという面持ちで、昭人は母から目を離した。

広間の中央では、宴はとどこおりなく進み、主役である清人と弘子は、友人知人に囲まれ、時折、賑やかな笑いをはじかせている。

四ヵ所に置かれた丸テーブルの上の料理は、なかなか豪勢である。伊勢海老やローストビーフがきれいに飾りつけられ、ビールやウィスキーはもちろん、カクテルやワインなども見られる。立食形式でなければ、とてもそろえられそうにない華やかさである。

しかし、伸枝は落ち着かない。自分の席がないということが、まずいけない。立ちどおしで

足も疲れてきた。勝利を促し、壁際に並んだ椅子の方に移動しようと思いはじめたとき、中央の華やかそうな一角から、五十年配の男女が、満面に笑みを浮かべて近づいてきた。悠子の両親の、棚田大造と菊子である。

「いやあ、今日はお天気もよくてなによりでしたな」

中小企業とはいえ貿易会社の社長だけあって、大造はでっぷり太った身体を豪快に揺らし、にこやかに笑った。傍の菊子も夫の大造に合わせて、

「昭人さんのお式のときも、そりゃあよく晴れた日で……昭人さんも清人さんも親孝行でいらつしやるから」

などとお世辞をいった。さらに菊子は、今時、若い夫婦が親と別居するのは常識であって、別にそれで親を見捨てるわけではない、などという意味のことを、陽気にしゃべった。伸枝は、そんな菊子の饒舌をけむたく思いつつ、表面では愛想よく微笑を浮かせていた。

「悠子も、いろいろお気に召さないこともあると存じますが、どうかお許しただいて……」
「とんでもございません。昭人はすっかりお宅に甘えてしまつて、ご迷惑ばかり」

と伸枝はいったが、もちろん、内心そんなふうには思っていない。

「いいえ、なにもしてさしあげてはおりませんのよ。昭人さんはお宅のご長男……悠子は外へ出した娘ですから、もう知らん顔で」

菊子は菊子で善意からそういつているのであろうが、伸枝の顔には白けた影が浮かんできてしまう。

女たちのやりとりを見ていた大造が、先ほどから慊然とした面持ちで立っている勝利に向かつていった。

「その後、どちらへお決まりになりましたか」

定年でやめた後の、再就職の話である。勝利は、大造がいやな方向に話を向けてきたと思つた。その氣になつて探せば再就職の道がないわけではないが、勝利としては、五十五歳まで勤めあげて、ほっと一息ついた心境である。また息づくひまもなく次の仕事に身をまかせるより、ここらで一度、今まで生きてきた自分の人生を振り返り、改めて新しい自分自身の生き方をさぐつてみたいと思つている。大造は、そんな勝利の心境を知るよしもなく、快活に、

「定年といつても、まだまだ働き盛り。これからですよ。昭人君も心配しておられたようだから」

「はあ……」

「まあ、高村さんくらいになれば、引く手あまたでしょうが……もし失礼でなければ、私の会社へいらしていただいてもと、悠子とも話していたんですが……」

「ありがとうございます。またお願いにあがるかもしれませんが、その節は何分よろしく」

儀礼的にせよ、勝利は深々と頭を下げた。

夫の勝利のそんな態度を見ていて、伸枝ははなはだ面白くなかった。尊大といつてよいくらいに悠然とかまえる大造に比べ、自分の夫の、この不甲斐なさはどうだろう。大造夫妻が軽く会釈をして他に移るのを待ちかねたように、

「あなた、いくら就職難だといったって、棚田さんにお世話になるのだけはやめてくださいよ」

「……………」

「これ以上、悠子さんのお実家^{まこと}に厄介かけるようなことになったら、昭人が可哀そうですよ。今だって、悠子さんに頭があがらないのに」

「俺のことだったら、そんな心配……………」

と昭人が、伸枝と勝利の間に割って入るようにしていった。

「母さんが、いやなのよ」

伸枝は断定的に、ぴしやりといった。昭人も勝利も、憮然とした顔で伸枝を見た。

そのとき会場に大きな拍手がわき起こり、この会話は幸いにも中断された。人波が動く方向から、洋装にお色直しをした弘子と、白いタキシードに着替えた清人が、兩人とも頬を紅潮させて広場に入ってくるところだった。いつの間にか伸枝の隣りにきていた、伸枝の妹の峯子^{みねこ}が、「何度お色直しをしたら気がすむのかしら」

と思わずつぶやくようにいうほどの、華やかな空気である。峯子は伸枝と顔を見合わせた。伸枝も同感で、

「俳優の結婚式じゃあるまいし……………」

と苦々しくつぶやく。

実際、二人のお色直しは、戦後の物資欠乏時代に結婚せざるを得なかった伸枝たちにとって